

石田瑞磨

日本古典文学と仏教

日本古典文学と仏教

石田瑞磨

筑摩書房

石田瑞麿 (いしだ みずまろ)

1917年生まれ 東京大学文学部印度哲学梵文学科卒

現在 東海大学教授 文学博士

著書 往生要集①～② (1963～64, 平凡社)

親鸞 (「日本の名著」⑥, 1969, 中央公論社)

源信 (「日本思想大系」⑥, 1970, 岩波書店)

鑑真 (1974, 大蔵出版)

日本仏教における戒律の研究 (1976, 中山書房仏書林)

日本仏教史 (1984, 岩波書店)

親鸞全集①～④別巻① (1985, 春秋社)

地獄 (1985, 法蔵館)

民衆経典 (「仏教経典選」⑩, 1986, 筑摩書房)

日本仏教思想史研究①～⑤ (1986～87, 法蔵館)

悲しき者の救い (「仏教選書」, 1987, 筑摩書房)

日本古典文学と仏教

昭和六十三年四月十日 初版第一刷発行

著者 石田瑞麿

発行者 関根栄郷

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話 東京 (三六) 五三一 (營業)
振替 東京 (二四) 空二 (編集)
印刷・株式会社 井村/多田
製本・株式会社 鈴木製本所

乱丁・落丁本の場合は、御面倒ですが、小社読者係宛に御
送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-480-82240-2 C1095 Printed in Japan 1988

©Mizumaro Ishida

凡例

- 一 本文中の（ ）は脱文・脱字・文意を補ったもの、へゝは割注、「」は文意をとりやすくするために引用の前後を補ったもの、「」は仮りの番号である。
- 一 古典の引用に当たっては、読みやすさを考慮し、著者が適宜に手を加えたところがある。
- 一 出典を示す場合、左の略称を用いた。注記に『新編国歌大観』の該当する巻数、頁数、上・中・下段の別を（国歌一・九三上）のように表示した。この外は適宜、表記した。

国歌	『新編国歌大観』	群書	『新群書類従』
大系	『日本古典文学大系』	統群書	『統群書類従』
文庫	岩波文庫所収本	統々群書	『統々群書類従』
全書	『日本古典全書』	大正	『大正新修大藏経』
新潮古典	『新潮日本古典集成』	仏全	『大日本仏教全書』
思想大系	『日本思想大系』	聖全	『真宗聖教全書』
国史大系	『新訂国史大系』	日蓮遺文	『昭和定本日蓮聖人遺文』
史料大成	『増補史料大成』		

目次

序章 狂言綺語について……………三

- 文学の負目 5 狂言綺語へのめばえ 6 つくり物語の弁護 8 狂言綺語の反省と自覚 9 狂言綺語の反省のおこり 11 狂言綺語の理解の変容 13

第一章 無常の文学……………一九

I 無常感 21

- 仏足石歌 21 人麿と旅人 22 憶良と家持 24 勅撰集 26 私家集 29 物語りの世界 30

II 無常感の展開 34

- 和歌の世界 34 連歌の場合 37 宴曲などの場合 38 説話の世界 40 『発心集』 41 『閑居友』 42 『雑談集』 45

III 長明・兼好の無常感 47

- 『方丈記』 47 『海道記』 49 『徒然草』 50

IV 道元・日蓮の無常感 56

道元 56 日蓮 60 一遍 61

V 『無常講式』と蓮如 63

『無常講式』64 もののあわれ 67

VI 運命と因果 70

『平家物語』の場合70 運命について73 『愚管抄』の運命
観75 因果について77 宿世について79

第二章 『法華経』と文学……………八五

I 序 87

法華八講の起源と流布 87 『法華経』理解の一端 91

II 『法華経』と和歌 95

和歌との関わり 95 道長の詮子追善二十八品和歌 99 法華三
十講 102 選子内親王二十八品和歌 103 『赤染衛門集』106 俊成
『長秋詠藻』二十八品和歌 107 西行と法華信仰 111 慈円と法
華経和歌 117 俊頼と法華経和歌 125 『寂蓮法師集』128 『壬二
集』131 定家『拾遺愚草』133 「四要品」と和歌 136

III 『法華経』と今様 141

仏教歌謡 141 『梁塵秘抄』 142
法文歌の心 147

IV 『法華経』と謡曲 150

謡曲の世界 150 女人成仏 151 草木成仏 153 謡曲の思想性 155

V 『法華経』と説話伝説 159

『靈異記』 159 『今昔物語』 163 『宇治拾遺物語』 172 『発心集』 180

VI 『法華経』と物語り 付歴史物語・戦記物語 184

物語り 184 『源氏物語』と『法華経』 184 『狭衣物語』と『法華経』 192

歴史物語と戦記物語 199

『大鏡』 200 『栄花物語』 202 『保元物語』と『平治物語』 205

『平家物語』 206 『太平記』と『曾我物語』 207

第三章 密教と文学

I 修法と文学 213

密教伝来 213 密教事相 215

II 密教と和歌 218

勅撰集の釈教歌 218 家集と釈教歌 221 西行と密教 224 『拾玉

集』の密教歌 228

III 密教と歌論 231

和歌陀羅尼論 231 和歌陀羅尼論のおこり 235

第四章 浄土教と文学

I 序 241

浄土教の流布 241

II 浄土教と物語り 245

浄土教と文学の接触 245 『宇津保物語』 247 『落窪物語』 249

『源氏物語』と浄土教 251 『夜の寢覚』と浄土教 258 『浜松中

納言物語』 260 『狭衣物語』 264

III 浄土教と歴史文学 269

『往生要集』成立以前 269 『大鏡』と浄土教 270 『今鏡』の場

合 272 『保元物語』と浄土教 274 『平家物語』の浄土信仰 275

『曾我物語』の浄土教 281 『太平記』の浄土教的性格 286 『増

鏡』の浄土信仰 289

IV 浄土教と説話 付御伽草子 293

『今昔物語』について 293 『宝物集』の特色 300 『古事談』と

『宇治拾遺物語』 303 『十訓抄』 306 『古今著聞集』 308 『私聚百

因縁集』の特異性 311 『撰集抄』 314 『沙石集』 316 『三国伝

記』 320

『御伽草子』の世界 325

本地物 328

V 浄土教と詩歌 333

勅撰集の浄土教歌 333 『玉葉集』と『風雅集』 336 『成尋阿闍

梨母集』 340 『散木奇歌集』 343 『拾玉集』 346 朗詠の世界 349

今様の世界 351 宴曲の世界 354 小歌の世界 355

VI 浄土教と芸能文学 362

能 362 狂言 367 浄瑠璃 372 歌舞伎 378

あながき 382

人名索引

書名索引

日本古典文学と仏教

序章 狂言綺語について

文学の負目

文学と仏教との関わりという場で、わけても文学の中に仏教が介在している場合、これを文学の側に立っていえば、何を取り入れようと自由であって、仏教はただの一素材にすぎない。しかしこのことは、仏教の側から見た場合、少なくとも仏教的な意識を作者が抱いた場合、作者に対して仏教的意識の中で作品を書いたことに改めて一種の反省を強いる。その点、たとえ仏教思想を介入させた作品を作ったとしても、仏教的な意識の制約と無関係に自由に作りえた場合は、作者に反省は無縁であった。仏教と無関係な場合はなおのことである。

たとえば、作品の作者が僧である場合をとりあげてみる。この場合、一番手取り早いのは和歌を読んだ僧である。『古今和歌集』を例にとると、そこには、僧正遍昭とか素性法師、喜撰法師といった人物が浮び上がる。僧正の極位を得た遍昭（八一六—八九〇）をとっていえば、その出家後の歌は「達観した真理に迫る思考を客観的に詠み上げるもの、洒脱な余裕のある知的描写をもって客観美をえがき出す歌が多い」（『日本古典文学大辞典』五・四二。阿部俊子「遍昭」の項）と評される。しかし極く平凡な思考に立って、『古今和歌集』巻一五、恋歌五に収まる、

老わがやどは道もなきまであれにけりつれなき人をまつとせしまに

老今こむと（すぐに）いひてわかれしあしたよりおもひくらしのねをのみぞなく（ないてばかりいる）

の二首が「僧正へんぜう」によつて、どのような心境の下で読まれたかを思うとき、この「恋」歌が客観的に世の恋に迷っている俗物の心はこんなものだといった冷徹な洞察とは思えないものがある。自己の体験とは無関係ではあつても、また同じ客観視とはいつても、「恋」を扱う姿勢それ自体は遊びの世界である以上、何を好んで、あえて「恋」を扱つて遊ぶ必要があるか、は問われておかしくない。もっともこれが遍昭の出家以前の歌なら、問うのは愚といふことになるが、僧正という極位を得た僧として、また出家後、円仁や円珍に師事したという経歴をここにもち込むことを可能にする場合はまた別だと思われる。⁽¹⁾

しかし、そうした遊びは、ここでは問題になつた形跡はない。言葉の上の遊びは天台僧が受持する梵網菩薩戒の妄語とは無関係と考えたからだろうが、妄語が大妄語だけでなく、小妄語をも含めるとすれば十善戒の「綺語」には該当する。しかしこれを「綺語」としてはばかる考え方はなかつた。智顛の『菩薩戒経義疏』巻下、「妄語戒」について、犯戒の条件に「五縁」を説き、その中に「欺誑心」を説く限り、言葉の遊びは「欺誑心」に相応するかと疑われるが、そうしたことはやはり考慮された形跡は見当たらない。しかしやがてこれが問題の俎上に上るときが訪れる。慶滋保胤（*一〇〇二）が主宰して大学寮の学生二十人に叡山の天台僧二十人が協同して設立した勧学会がそれである。勧学会の始まりは康保元年（九六四）、遍昭没後七十余年を経ているが、素性法師などからは四、五十年のへだたりである。

この勸学会がどういふ催しであったかはいま詳しくは『三宝絵詞』巻下にゆずるとして、これが問題提起となつたのは白居易（白樂天）の「願はこの生の世俗文字の業、狂言綺語のあやまちをもてかへして当来世々讚仏乗の因、転法輪の縁とせむ」とある願の偈である。この詩は『白氏文集』巻七一『香山寺洛中集記』に収めるものであつて、『白氏文集』は承和五年（八三八）には仁明天皇に献上されたことが『文徳実録』にみえ、早くから流布し、漢詩をもてあそぶものは、これを師範と尊んだものであるから、保胤にしても白居易に学んで、勸学会には作つた詠藻を寺に納めたのである。

この詩句は藤原公任の『和漢朗詠集』（二〇一八）にも収められるが、選子内親王の『発心和歌集』（二〇一二）真名序に「知_レ歌詠之功高為_レ仏事焉」（群書二四・六九三上）とあるのもこの考えに立つものであり、また藤原明衡（*—一〇六六）の『雲州消息』（一世紀半ば頃）巻下本には「又_レ嘔_レ一兩禅侶。可_レ講_レ法花妙典。講後賦_レ一絶。欲_レ為_レ讚仏乗之縁。如_レ勸学会_二歟」（群書九・四二九下）とある。こうして一旦、この詩句が注目を引くと、これを避けて通るわけにはいかない状況がおのずと醸成されたとみられる。

『狭衣物語』巻二にのせる「当来世々、転法輪の縁とせん」もその早い例であり、『栄花物語』巻一五「うたがひ」には、勸学会のことを記して、白居易の詩をのせる。『梁塵秘抄』巻二の今様、「_三狂言綺語の誤ちは、仏を讀むる種として、_あ籠_き言葉も如何なるも、第一義（真実）とかにぞ帰るなる」は、さらにこれを一步、展開させて『涅槃經』巻二〇「諸仏常軟語。為_レ衆故説_レ。籠_き言及軟語。皆帰_レ第一義」の趣意を加え、さらに敷衍したもので、寂然の『法門百首』に「籠_き言契語みな第一義に帰して、一法としても実相の理にそむくべからず。いはんやこの卅一字のふでのあと、ひとへに世俗文

字のたはぶれにあらず、ことごとく権実の教文をもてあそぶなり。……」（同二四・七一七上）とあるのも同一の趣意である。

つくり物語の弁護

しかし、この詩句に対するこのような関心は、ただこれだけではすまない方向に一步、踏み出すに至る。その極めて端的な例を三卷本『宝物集』巻下に求めると、「不妄語」を述べて、「マチカクハ紫式部カ夢ニ、虚言ヲ以源氏物語ヲ造シ故ニ、地獄ニ墮テ苦ヲ受タリト見ヘシ。故ニ早源氏物語ヲ破リ捨テ、一日経ヲ書テ唱ヘシト云ケルトテ、歌読ミ共集テ務ナシアヒタリシ也」（統群書三二下・二九六下）とある。ここには『源氏物語』は絵空事をかきつづつた虚言に終始したもの、いわば「妄語」と捉えられたことを語って、余蘊がない。紫式部墮獄のことは、『今鏡』巻一〇、「うちぎき（つくり物がたりのゆくゑ）」にもみえるが、『今鏡』は終始、弁護の立場に立つ。物語りを「妄語などといふ」のは当たらない、「そらごと」^{（虚言）}ではなく、「綺語とも雑穢語など」とはいつても、人の命を奪ったり、宝を盗んだりする深い罪とは違い、「輪廻の業とはなるとも、^{（余善）}ならくにしづむほどにとや」^{（イナシ）}ではない、「仏も譬喩経などいひて、なき事をつくりいだし給て、ときをき給へるはこと、虚妄ならずとこそは侍・れ」といい、紫式部は「たゞ人」ではなく、「妙音観音など申、やんごとなき聖たちの女になり給て、のりを説きて」人を導いたものとまで讃える。また、さらに『源氏物語』が男女の「艶なることをげに／＼（実しやかに）」とかきあつめ」^{（イナシ）}たもので、これがどうして尊い御法といえるかという反論に対しても、天子をはじめとしてこの書を宝物と尊んで来たことをあげ、この書は、罪深いこ